島根大学教育学部紀要（教育科学）第18巻　31～45頁　昭和59年12月

新教育思想と舞踊教育

―玉川学園・小原國芳の論と実践を中心として―

中　野　祐　子*

Yuko NAKANO

New Educational Thought and Dance Education
—The Theory and Practice on TNMAGAWA GAKUEN・Kuniyoshi OBARA—

はじめに

明治の前期，文明開化の波にのって，封建的な女性観が打ち破られ，明治5年の「学制」によって，男女が小学校に入学する。また，フェリス女学院（明3），神戸女学院（明8），共立女学校（明8）など女子校は次々に建てられ，私学の創立は，今日の女性の教育に少なからぬ役割を果たしている。

明治4年に，はやくもアメリカ大陸におくられた女子留学生は，後に，津田塾大学（明33）の創始者（津田梅子）となる。

一方，お茶の水女子大学の創立は，明治7年，東京師範学校の女子部となったのは明治18年，明治30年代になって，女子の高等教育が普及しはじめる。

このような官学の充実と，一方に独自の校風を確立していった私学の抬頭は，明治期の教育史に注目されるところである。この頃，東京女子大学（明33），女子美術大学（明33），日本女子大学（明34）等が次々に創立され，明治42年には，奈良女子大学も創立された。

大正期に入って，デモクラシー思想の中で，聖心女子大学（大正4），昭和女子大学（大正9），杉野女子大学（大正15）と，私学の創設がつづく。

「私学」として，建学の精神に，自由の風を導入できる学校教育の中で，「舞踊」について着目した私学はなかったのであろうか。

このように考える時，玉川学園の存在を知り，その実践の内容や，背景にある教育思想に興味を覚えた。

玉川学園は，大正新教育運動の嵐の中で，昭和4年に，小原國芳によって創設された私学であり，「全人教育」を理念としている。この玉川学園の「全人教育」の理念の中で，舞踊は，どのような位置を占め，どのような価値を見出されて，今日に至ったのであろうか――。その論と舞踊教育の実践を明らかにし，今後の，教育と舞踊の在り方を検討する一助としたいと考えた。

研究方法

小原國芳の著書と，玉川学園の雑誌及び教育実践記録を主要参考資料として，文献研究によって，考察を進めた。

目次

第1章　大正新教運動と玉川学園
　第1節　大正新教育運動
　　1.　大正新教育運動とは何か
　　2.　欧米の新教育運動
　　3.　大正新教育の実践
　　4.　「八大教育主張」
　第2節　玉川学園の創立とその後の歩み
　　1.　玉川学園の創立と新教育
　　2.　玉川学園の歩み
第2章　小原國芳の「全人教育論」
　　―真善美聖健富の教育―
　第1節　小原國芳の人と思想
　　1.　略歴
　　2.　著書他
　　3.　人生観
　第2節　「全人教育」の概念

*　島根大学教育学部保健体育研究室

1．「全人教育」とは何か
2．6つの価値
3．正一反一合の人生観
4．全人教育の思想的背景
第3節　「全人教育」の実践
1．玉川学園小学部の「全人教育」の実践
2．玉川学園中学部の「全人教育」の実践
3．玉川学園高等部の「全人教育」の実践
第3章　「全人教育」と舞踊教育
第1節　「全人教育」と体育
1．「全人教育」としての体育の目的
2．「全人教育」としての体育の方法
第2節　「全人教育」と芸術教育
1．「全人教育」としての芸術教育
2．「学校劇」と舞踊
第3節　「全人教育」としての舞踊教育の理論と実践
1．玉川学園の舞踊教育の展開　―附年表
2．リトミック
3．モダン・ダンスの導入から，クリエィティブ・ムーブメントまで
終章　結論

第1章　大正新教育運動と玉川学園（省略）

第2章　小原國芳の「全人教育論」
―真善美聖健富の教育―

第1節　小原國芳の人と思想

1．略　歴

小原國芳は，1887年に鹿児島に生まれ，両親に早く死なれて，父親の借金と多くの兄第の長男として赤貧の中で育ち，1900年，13歳で電信技師により，1904年，17歳で鹿児島電信学校に入学したが，教師を志して，1905年鹿児島師範学校に入学した。卒業後，1909年，22歳で広島高等師範学校本科英語科に入学し，この時，鯵坂家に養子として入籍する。卒業後，香川師範教諭となるが，2年後の1915年に，28歳で京都帝国大学哲学科に入学し，卒業後，1918年に広島高等師範学校付属小学校に就職し，「学校劇」を創始する。この頃の学校劇には，「天の岩戸」，「桃太郎」，「水師営の会見」等がある。翌年の1919年，小原32歳の時に，沢柳政太郎の私立成城小学校の主事として迎えられ，この時に養家鰐坂家を出る。またその翌年の1920年に高井信と結婚し，1921年に長男哲郎が生まれる。この年に，「八大教育主張大会」において，「全人教育論」を語り，また，第1回学校劇発表会を行う。成城小学校は，1922年成城第2中学校，1925年成城玉川小学校，成城幼稚園，1926年成城高等学校，1927年成高等女学校と，次々に規模を拡大していき，小原は，1928年に幼・小・中・高・高女の校長事務取扱となった。この間，1923年から月刊雑誌「イデア」を主宰刊行し，1924年にはダルトン・プランのパーカスト女史を招聘し，1926年には雑誌「全人」を創刊している。

小原は，1924年に砧村の土地買収をして，1929年に財団法人玉川学園を設立し，より徹底した全人教育を行なおうと，成城学園から玉川学園へと移った。当時の玉川学園の全人教育は，労作教育と芸術教育に特色を持ち，小原は教育実践と講演活動を精力的に行った。第2次世界大戦中の1943年には身辺に変動が多く，1944年には，玉川学園初等部，中等部，高等女学校，専門部各校長を辞任した。しかしながら，戦後，小原は全国に教育講演行脚をはじめ，1947年には，玉川大学を開学し，1952年に玉川大学学長に就任した。更に，1962年には，玉川大学工学部開校，女子塾完成，そして1963年には男子塾完成，1965年には玉川大学女子短期大学開学等，玉川学園の規模は拡大していった。1973年，小原86歳で，健康上の理由から玉川学園の公職を辞し，玉川学園総長となり，1977年，90歳で逝去した。

また，1964年に私立大学協会常任理事就任，1968年世界新教育協会日本支部長就任等，国内・国外に向けての活動も行い，勲二等瑞宝賞（1972年），デンマーク国王より「タンネベルク勲賞コマンダ賞」（1975年）等多くの賞を受賞している。

略年譜は省略。

2．著書他

小原國芳は，玉川学園の組織の1つである玉川学園出版部から，大部分の著書，訳書，編集書，監修書を出版いしてる。

小原の著書の内容は，教育に関するものが多く，「教育の根本としての宗教」（大正8），「宗教と教育」（大正11），「宗教教育論」（昭和47）にみられるような宗教と教育を論じたも，「思想問題と教育」（大正8），「教育の根本としての哲学」（大正12）にみられるような哲学と教育とを論じたもの，「修身教授革新論」（大正9），「修身教授の実際（上），（下）」（大正11），「道徳教育論」（昭和32）にみられるような道徳と教育とを論じたもの，及び，「学校劇論」（大正11）にみられるような芸術と教育とを論じたものがあり，これらは，小原國芳の「全人教育」において絶対価値とされる宗教，哲学，道徳，芸術という4つの価値と教育に関する著書であると言えよう。

また「ベルギーの新学校」(大正11),「理想の学校」(大正11),「玉川塾の教育」(昭和5)にみられるような,小原の理想とする学校教育全体を捕えたもの,「母のための教育学」(大正14),「日本女性の行方」(昭和8),「日本女性の理想」(昭和12),「理想の母」(昭和49)にみられるような女性と教育に関するもの,また,「ニホンのコドモタチへ」(昭和5),「コドモドウブツノクニ」(昭和5),「子供たちへ」(昭和5」,「少年たちへ」(昭和5)等にみられるような子供向けの著書がある。

その他,「自由教育論」(大正12),「教師道」(昭和14),「教育出国論」(昭和21),「全人教育論」(昭和44),「師道」(昭和49)等の著書は,小原の教育の理念を知る上で重要であろう。

更に,小原國芳の著書の集大成とも言える「小原國芳全集48巻」(昭和25〜48)も出版されている。

次に,小原國芳の訳書をみると,「フレーベル,人の教育」(大正12),「ペスタロッチ隠者の夕暮」(昭和4),「カンジンスキーの芸術論」(昭和4)の3冊がある。また,小原國芳の編集のものをみると,「国民学校研究叢書」全12巻(昭和15),「目で見る全人教育」シリーズ全8巻(昭和39〜54)があり,更にまた,小原國芳の監修したものをみると,「玉川こども百科」100巻(昭和26〜35),「玉川百科辞典」31巻(昭和33〜38)等の百科辞典や,「日本新教育百年史」8巻(昭和44〜46)という新教育実践史及び教育名著の復刻版としての「教育の名著」シリーズ15巻(昭和47〜52)があり,知識の宝庫としての百科辞典や教育の古典的名著及び教育実践の記録等の重視がみられる。

小原國芳の著書等のリストは省略。

3. 人生観

小原國芳は,人生観について,3つの分類を示している。すなはち,「浅薄なる楽天主義」,「厭世観」,「超越的楽天観」の3つである。まず第1に,「浅薄なる楽天主義」というのは,「飲めや歌えの浮調子で,世の中を茶化して暮らす浅薄なる楽天観」[1]であるとし,「刹那主義と感覚主義と虚無主義」[2]がこれにあたるとする。小原は,「感覚的欲求のみでは真の幸福は得られない」[3]と考えて,これを批判する。第2の「厭世観」は,「人生を以て苦と見る」[4]人生観であり,人生を「病気と貧苦,困難と罪悪,懊悩と迫害」[5]で満ちたものとして見,「意欲衝動」をすべて悪とみたその教理は自然肉欲を絶つことを以て善と」[6]するので,「自我を否定し」[7]しかも「社会に対する義務を怠」[8]るという意味で,「甚だしき謬見である」[9]として,やはり批判する。第3の「超越的楽天観」は,「世界を以て,苦痛と快楽とを超越するものである。だから一名超越的厭世観ともいう」[10]とし,小原は,この立場をとる。この人生観は,「スピノザ,ブルーノ,仏教の大乗教,キリスト教の立場」[11]と同様であるとし,「感覚の世界にいて,感覚の世界を超越して悠然理想を楽しむ」[12]という立場であり,霊と肉,理想と現実,天と地という相反する2つのものをふまえて,常に理想に向かう精神を持ち続けていくという立場であると言えよう。

つまり,小原は,人生で出会う「呪咀,煩悶,苦痛」[13]のために厭世的になったり,それらを避けて刹那的,感覚的,虚無的になることを戒め,それらの中に,「深い意味,神の恩寵を見い出す」[14]という強い意志を持ち,この強い意志で理想と現実をふまえて追求していく人生観を持っていたと言うことができよう。

従って,小原の「幸福」に対する考え方は,人生が,「喜劇となるか悲劇となるか,苦となるか,楽となるか,すべてその人の心にある」[15]として,幸福というものは,心の持ち方次第で決まると考え,「しかも,人生の幸福は肉にもない,富にもない,地位にもない,名にもない。また霊のみでもない。霊肉一致の妙境といおうか,第3帝国を要求する」[16]として,正一反一合という反対の合一の妙境が幸福であるとしている。

また,人生の目的に関して,小原は,「千古の謎かもしれぬ。だが人生の目的は真の自己本性の発展,真我の発揮,第一義の生活である」[17]とする。換言すると,「人生の目的は衷心内奥の神の声に従い,第一義の生活をすること」[18]であるとし,神の声に従った最も大事な根本的意義のある生活に,人生の目的があるとする。従って,「真摯に人生を考うれば真摯なる宗教に達せざるを得ない」[19]とし,人生を真似目に考えれば,必ず宗教に行き着くと考える。ここで言う「宗教」というのは,「人格的集合的生活を統整し,規定する最高の要素である」[20]り,「生活,Life そのものである」[21]るとし,いわゆる特定の宗教団体や教理といった狭い意味で用いられているのではなく,広い意味での信じる心すなはち信仰心の総称として用いられている。

つまり,小原は人生の理想と現実とをありのままに捕え,正一反一合という反対の合一の妙境を追求する強い意志を持ち続けていくという人生観に立つ。従って,幸福もこの境地を指すという。更に,人生の目的を,神の声に従った真我の発揮にあるとし,人生を真面目に考えれば,生活を統整,規定する最高の要素である宗教に達せざるを得ないと考える。

このような小原の人生観は,小原の教育観の基底となっていると言えよう。すなはち,貧困から苦労を重ね,

教育の道を志して，複数の大学を卒業し，無一文から，玉川学園を創立し，真の教育の実現のために様々な困難を切り開き，歩み続けた小原國芳の人生は，人生の様々な矛盾に対して，常に，正一反一合という反対の合一の妙境を追求し，強い信念を持った真摯な生の連続であり，この小原國芳の生き方そのものが，小原の提唱する「全人教育」の理想の生き方であるとみるべきであろう。

第2節　「全人教育」の概念

1.　「全人教育」とは何か

小原國芳は，大正10年8月の「八大教育主張大会」において，初めて「全人教育」という名称を用いた。[22] 小原は，「全人教育」を，「全人教育とは完全人格即ち調和のある人格の意味です」[23]と定義づけ，更にその内容について，「教育の内容には人間文化の全部を盛らねばなりませぬ。」[24]と，教育と文化の関わりを示し，更に，「人間文化には6方面あると思います。すなわち，学問，道徳，芸術，宗教，身体，生活の6方面。学問の理想は真であり，道徳の理想は善であり，芸術の理想は美であり，宗教の理想は聖であり，身体の理想は健であり，生活の理想は富であります。教育の理想はすなはち，真善美聖健富の6つの価値を創造することだと思います」[25]と述べ，人間文化の6つの価値と教育とを結びつけている。

2.　6つの価値

人間文化の6つの価値について，小原は，「真・善・美・聖の4つを絶対価値と言い，健富の価値を手段価値と」[26]して2分し，「この6つの価値が…（中略）…調和的に生長」[27]することを教育の理想としている。

小原は，この6つの価値を，自分自身の価値体系（図1参照）の中で示している。

図1[28]

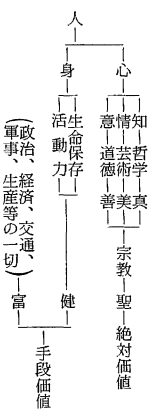

図1は，まず，人を心身の両面から見て，「心」を絶対価値，「身」を手段価値としていることを示す。

手段価値には，「健」と「富」をあげ，手段価値「健」については，「生命保存と精神活動の源泉たる健康」[29]が必要で，「出来るだけ永続的に絶大なる精神活動の出来る原動力を供給するところに意味がある」[30]として，「人間活動を補給し，助けて行くところに絶対必要がある」[31]という。更に，「これは決して身体を蔑視する意味ではなく，不可欠の手段として認めている」[32]と述べ，身体を不可欠の手段価値として，まず価値づけている。

もう1つの手段価値として，「発明，工夫，交通，政治，外交，産業，軍事，法律等一切に広義における富」[33]をあげている。富価値も，「不可欠の価値」[34]ではあるが，「吾人は富の主人たるべきであって，富に使役されてはなりませぬ」[35]と，富価値に対する姿勢に戒めを与えている。

次に，絶対価値について，「精神生活の方面においては真善美の3価値と聖価値の4つを絶対価値として認めます。私自身としてはやはり私自身のドコかに，聖価値を最上価値と認めたい要求があります。」[36]と述べ，宗教の理想である聖を最上価値として他の3価値と区別している。

また，この6つの価値を調和的に生長させる「真の人間によき教育」[37]は，「一般陶冶とでも云うような生ぬるいものではない」[38]し，また，「個性を没却したような無味乾燥なものでもない」[39]のであり，「神に与えられた自然をそのまま伸ばして行って，ただ各自は各自独自の世界を実現しながら，しかも，そこに各自に完全境が成就されること」[40]を理想とし，全人教育は個性尊重の教育でもあることを指摘している。

またその上に，理想が統合された世界が存在し，その世界での6つの価値の相関関係について，「文化の産出者および運載者が結局は人格者である以上は，これらの諸価値の間に必然的に親密なる相関関係が存在する」[41]とし，6つの価値に，親密な相関関係が存在することを指摘し，「真に『人』が純粋に自然に成長して行くならば，当然そこには渾一的調和的境地が現出され…（中略）…1つの生活そのもの，『人』そのものの生のみがある」[42]とし，6つの価値の渾一的調和的境地が生活そのものの中で現出されるという。（後略）

3.　正一反一合の人生観

前述のように，「全人教育」の理想としての6つの価値には相関関係が存在し，渾一的調和的境地が生活そのものの中で現出されるので，「教育の究極目的は唯一」[43]であるが，現実において，小原は，「人生は矛盾」[44]であるという人生観に立つ。すなわち，自由と拘束，霊と肉，個人と社会，国家と社会，理想と現実などの「二元の対立といたいたしい矛盾」[45]が存在するとして，「この血まみれの葛藤の解決を私はヘーゲルの弁証法に求めます。止揚（aufheben）です」[46]と述べ，「この止揚されたる第3帝国，この境地を私は理想としたい」[47]とし，人生の矛盾すなわち価値間の矛盾の葛藤の解決を，正一反一

合というヘーゲルの弁証法に求め，合という止揚の世界を，小原は全人教育の理想とした。

また，小原はヘーゲルの他に，ヘラクレイトスの「争闘は万物の父なり」と，G．ブルーノの反対の合一 Coincidentia Oppositorum を指摘[48]し，「われわれは，…（中略）…反対の合一ということを，全人教育の立場から特に大事にいたします。大胆で小心で，朗らかで淑かで，快活でたしなみがあって，気はやさしくて力持ちで，よく学びよく遊び，よく儲けて正しく費い，これらの2面を1つにした花も実もある立派な紳士に仕上げたいのです。コヤシも担げばピアノも弾け，拭き掃除もすればお茶や生花もでき，雑巾も綴れば絹の着物も仕立てられ，ドブ溝もさらえば第9シンフォニーも歌え，薪割りもすれば劇も絵も書いたし，ソロバンもはじくがお経も繙ける玉川っ子にしたいのです。自ら，ピアノもヴァイオリンもチェロも製作をはじめました。同時に豚も飼って居ます。ネクタイもしめれば仕事着で田の草も取ります[49]」とし，全人教育の理想を，反対の合一の立場から具体的に示している。

4．「全人教育」の思想的背景　（省略）

第3節　「全人教育」の実践　（省略）

第3章　「全人教育」舞踊教育

第1節　「全人教育」と体育

1．「全人教育」としての体育の目的

小原は，体育の目的を2つあげ，「第1に立派な健康を得ることであり，第2には，体育に依って，精神の訓練をすることである[50]」とし，健康と精神の訓練との2つの目的のために体育を行うとする。

第1の目的すなわち健康のための体育という意味から，「オリンピックの競技よりもチェコスロバキアのソコール運動が遙かに偉[51]い[52]」とし，「スポーツが発達すればする程，大勢は馬鹿になり，極て少数の者だけが競馬的に堕落して行く[53]」というスポーツのエリート化と，その頂点にある近代オリンピックを批判し，チェコスロバキアのソコール運動や，デンマークのデンマーク体操や，古代オリンピックのような，専門化，選手化されることのない，健康のための for all の世界の体育を理想とする。小原は，古代オリンピックの在り方について，「ギリシアのオリンピックゲームの盛んなる時代を思い出して見よ。ギリシアが音楽と体操と，体育と彫刻と，運動競技と学問詩歌と，凡てが調和的に全人的に，平衡しておったことをお互い考えなければならぬ[54]」として，運動競技と学問詩歌と全てが調和的に全人的に平衡した古代ギリシアのオリンピックを理想とする。更に，体育の目的としての健康について，「もう一つつけ加えたいことがある。それは健康美である[55]」として，健康美すなわち「均整美のとれた整頓された身体[56]」を重視し，その理想をデンマークにみている[57]。

この点からみた，日本の体育の現状について，「日本教育の持つ悲しかるべき幾つかの欠点の最大の1つは，それは今日の体育が興行化され，専門化され，選手化されスポーツ気狂いにされていることである[58]。」と，体育の興行化，専門化，選手化を批判する。

次に，体育の第2番目の目的すなわち体育による精神の訓練については，訓練されるものの例として，「忍耐，機敏，協同，統制，勇敢，度量，寛容，礼儀，公平，正義[59]」をあげ，イギリスのスポーツの精神に理想をみる。

2．「全人教育」としての体育の方法

小原は，理想の体育を実現させるために，「シェナイダー[60]を招き，ブック一行[61]を呼び，大きな体育館を造り，スタンドをこしらえて，新しく馬術部を設け，玉綿以下多くの力士たちに来て頂いて立派な土俵を作り……絶えず運動を奨励[62]」するというように，世界の第1人者を招き指導を受けたり，学園内に施設を作ったりして運動を奨励している。特に，「基礎になる体操を尊重して，体操の国民化，体操の一般化，体育の清浄化を希う[63]」という方針から，デンマーク体操を奨励し，「若い優秀なる体操教師を本山に1ケ年間の修練に派遣してい[64]る。更に，「序でに，親しく，欧州の体操学校を行脚させます。ベルリンのボーデの表現体操も，ジェネーブのダルクローズのリトミックも，ウィーンのツーン伯の自然体操も進んで取り入れています。無論，日本の弓道の姿勢も，艦漕ぎのワザも，柔道の投げわざも。石井漠さんの舞踊も。…『よいものは世界から』という信条で！[65]」というように外国及び日本の様々な体操に学びつつ，デンマーク体操を中心とした体操を行なっている[66]。また，他方では，外国産のスポーツとして，ラグビー，サッカー，スキー等を奨励し，武道として，剣道，柔道，カラ手，少林寺拳法，弓道，水泳道，薙刀，鎌，槍等を奨励している。特に，「体操と並んで，もう1つ強調したいのは，自然に接することによる体育の効果[67]」であるとし，「ことに白銀の雪は，純白でしかも内にきびしさをもって[68]」いるので，「猛吹雪のなかで自然と闘い，順応しつつ突破してゆく，他の運動に見られないスキーの尊さ[69]」を重視する。「さらに，スキーのほか，澄みきった大空，明るい太陽の光の中で，自然物を利用して鍛えて

ゆく，登山，ハイキング，遠足，水泳，ボートなどがある」[70]とする。自然に接する「登山やスキーは体育はもとより審美教育でもあり，宗教教育でもあ」[71]ると，全人教育において，健価値のみならず，美的価値，聖価値もあわせもつ教育方法として奨励する。

更に，「体育の生活化が行なわれてほしい」[72]とし，「1週間2時間か3時間の体育科，いろいろ盛り込んでほしいことですが，体育の時間以外でも，朝会前や，昼食後，放課後，あるいは家庭での，遊びを通しての体育も尊重して下さい。5分から10分ぐらいの整美（基本）体操が，朝晩の生活にしみこんでほしいのです。同時に，姿勢，歩き方，深呼吸，室の換気，十分な咀しゃくなど」[73]の具体例をあげて，体育の生活化を推進する。

第2節　「全人教育」と芸術教育

1．「全人教育」としての芸術教育

1）「全人教育」としての芸術教育の目的

小原は，「人間の本具する芸術活動の力に信頼して，心身の成長を計り，全人的に人の性能を発揮せしめ，人格の創造的発動をなさしめんとするのが芸術教育の根本原理である」[74]とし，芸術教育の根本原理を，心身の成長，全人的な人の性能の発揮，人格の創造的発動におく。すなわち，「人間完成のために，全人格完成のため，真人間をつくるために芸術教育を高調する」[75]とし，その程度は，真，善，美，聖，健，富という「6つの教育上の仕事が，バランスがとれるまでにやりたい」[76]とし，「子供の個性，土地の状況，家庭の状況，学校の歴史・事情と，いろいろ考慮に入れて，調和点を見出されて欲しい」[77]として，調和があり，しかも全人的な人格完成のための芸術教育を推進する。特に，「子供の創造的本能，想像的本能，探究的本能，構成的本能というものを無視してはならない」[78]として，子供の創造的能力に注目し，その開発を学校教育及び人間生活の中にとり入れる芸術教育を強調する。

小原は，「芸術」ということばを広義に解釈して用いている。すなわち，「芸術は情意の作用であり宜つ個性的な見方である」[79]とし，「広義に於て，教育も，教授も，講演も…運動競技も，数学も，器械製作も，理科の実験も，因数分解も芸術である」[80]として，あらゆるものの中に芸術の情意の作用を見る。だから，「ただ狭義の芸術のみをいうのではなくて，人間精神の創造的所産の全体を指して」[81]いるのである。

2）芸術教育必要論

小原は，芸術の理想としての美がそれ自体絶対的な価値であることの他に，芸術と人間生活との関係に視点をあてて次の6つの点から芸術教育必要論を主張する。

第1に，「美の受容は，我等に，自然と人生における一切の物象を尊重することを教える」[82]というように，美的態度によって一切の物象と事実を尊重するようになるとする。すなわち，「美的態度は，物質的，利己的態度に対する最も敢然たる抗議である」[83]とし，芸術の理想としての美価値が，道徳の理想としての善価値と結びついて全人的な人格形成に貢献するから芸術教育や必要であるという。

第2に，美的態度によって一切の物象と事実を尊重するようになることが更に深まって，美の受容によって，「人生と自然との一切の事象が如何に愛すべきものであるかを教える」[84]とし，美が愛を教えるということから，美価値と，宗教の理想としての聖価値とが結びつくから芸術教育が必要であるという。

第3に，一切の事象を愛することによって，「我等の世界は広くなって行く。深くなって行く」[85]ようになり，美の受容による世界に対する見方の広まり，深まりがあるから芸術教育が必要であるという。

第4に，美の受容は，「人間生活の救済である」[86]とする。すなわち，「仕事の芸術化，生活の芸術化を高調する必要がある」[87]として，仕事や生活の芸術化による人間生活の救済をあげる。具体的に，「ディ河の老粉ひき」[88]の作業しながらの歌，「船頭の船歌，馬子の馬子歌，地つきの地つき音頭」[89]等をあげ，このような労働歌の中の「芸術の力によりて慰めらん，力づけられ能率が増進する」[90]という例や，また，「昼があって夜があり，干しては満ち，働いては休み，苦しんでは楽しむ。師走が明けてお正月，田植えがすんで田草取って貧踊り，収穫がすんで豊年祭り」[91]という自然や生活や心情のリズムの例を示し，これらが芸術の力の効用であるとする。

第5に，「階級闘争の救済」[92]をあげる。すなわち，「老いも若きも，高きもひなも，同じ心になりて一郷一村楽しむこと」[93]ができる「公衆のための芸術とか，民衆のための芸術」[94]によって，「純な豊かな内面的精神的生活が国民として真に偉大ならしむる」[95]ことができ，その結果，階級闘争が救済されるという。

第6に，「生の昂進」[96]をあげる。すなわち，「真の創造は旺盛なる内部生命の迸発によって初めて起る」[97]ので，「芸術には打算より脱離した清い強い情緒が必要」[98]となり，旺盛な内部生命と清い情緒を持つことで生が昂進されるという。換言すれば，個性の発現としての創作や自

己の発現としての芸術のためには，「己に忠実に[99]」，「純一に…，誠実に…，真剣に…，[100]」なる必要があり，そのための力が，「力強ければ強い程ホンモノが出来る[101]」として，自己発現としての芸術が生命をふるい立たせる強い力を持つことから芸術教育が必要であるとする。

3）芸術教育の内容

小原は，教育の内容について，「功利的実利主義的な知育，消極的な君子然たる徳育[102]」を行う師範教育を批判し，「知育すら哲学を離れたる浅薄なもので，真に学問のための学問ではなく，その徳育すら，空林枯木，人生を砂漠化した人間味のないものである。……人生生活の基調をなすべしとも思われる芸術教育や宗教教育に至りては，ほとんど等閑視されてはいないか[103]」と，更に，師範教育の欠陥を指摘し，「名著名文の味読，清き絵画や音楽の鑑賞。特に演劇は具体的であるだけに人間形成には大きな力が与えられる[104]」として，芸術教育の推進を強調する。

また，芸術教育の内容として，小原が具体的に推薦するものをみると，演劇，舞踊，音楽，文芸という人工的な芸術と，自然美に親しむというような芸術体験との両面があり，両者から芸術教育を捕えていることがわかる。

4）芸術と他の絶対価値との関係

芸術は，小原の価値体系の中では，絶対価値の1つであり，その理想は美である。他の絶対価値には，宗教の理想としての聖，哲学の理想としての真，道徳の理想としての善がある。芸術は絶対価値であるから，「芸術のための芸術の独一の世界が存在する[105]」としている。この芸術の理想としての美と，他の3つの絶対価値の関係について，小原は，「真実の美は，善であり，聖であり，真である。同時に，真実の善は，美であり，聖であり，真である。真実の真も，美であり，善であり，聖である。いわんや，聖は真であり，美であり，善である。これら，みな根底にあっては共通同一物であろう[106]」とし，真，善，美，聖という4つの価値は，根底にあっては共通同一物であり，換言すれば，真，善，美，聖は同一物の異方面であるとする。（後略）

2．「学校劇」と舞踊

小原國芳は1918年（大正7）に，広島高等師範附属小学校に赴任し，「学校劇」を創始した。この「学校劇」という名称について，小原は，「『学校劇』という名前だけは，私自身の生んだものではないかと思っている[107]」とし，小原が，「学校劇」という名前の名付け親であると言う。そして，「学校劇」の活動自体は，当時の芸術教育運動の流れを汲むものであり，自由画，童謡，童話，童話劇，児童劇，家庭劇という名の下に芽ぶきつつあったものと主旨が同じである[108]という。（中略）

小原は，「学校劇」が必要な理由を多方面から捕えてあげている。①総合芸術としての価値，②子供の生活の充実，真の人格をつくるため，③遊戯の教育的価値④劇的本能の啓培，⑤子供の純真な芸術的表現を発露させるため，⑥劇の革新，⑦批評眼養成と正しき理解並びに劇の尊敬，⑧感情の純化，⑨内容上より，諸教科徹底のためにも，⑩徳性の涵養，⑪学校祭日一学校生活の文化化，⑫家庭改良と社会教化，という12の理由[109]である。

小原は，上記の理由から，「学校劇」必要論を強く主張するが，他方，舞踊については，小原自身が直接的に強く推進運動を行なったわけでもなく，また，特に「学校舞踊」という名の名づけ親であるという記述も見られない。しかし，小原は，演劇に対する「学校劇」と同様に，舞踊に対して「学校舞踊」という言葉を用いて，学校教育の中に舞踊を取り入れるということを実施する。

小原は，学校舞踊の目的を次のように説明する。「学校舞踊は，商業的な舞踊ではありませぬ。また，プロの人達のやるものでもありませぬ。勿論，豊かな芸術性，深い内容，美しい技術は必要ですが舞踊を通じて，子供たちの情操を思う存分伸ばしてやりたいのです。[110]」とし，情操教育のために行うとする。更に，「踊りをやっている子たちは，日常の何げない動作の中にも非常な美しさをもっています。機敏でしかもしとやかです。リズムがあります[111]」というように，動作の美しさを身につけるために舞踊を行うとする。また，「子供たちは，歌いたい，はねまわりたい，とび上がりたいのです。これを昇華させ，美しい清らかな芸術に結びつけ，更に深く，高い宗教的境地に導いてやるためには何よりだとさえ思います[112]」とし，運動と芸術と宗教との渾一的境地に導くのに適した教材であるとする。また更に，「舞踊は，音楽よりも世界共通のことばだと思います。人間の感情は，人種が違っても国が異り言葉が変わっても変わりませぬ[113]」とし，言葉を介さない心から心への感情伝達の手段としての舞踊に価値を見出し，学校教育の中に取入れる理由の1つとする。

このような価値を持つ舞踊は，「全人教育では欠かせぬ1つの項目[114]」であるとし，「もっともっと教育の中で大事にされねばならぬと思[115]」うとし，「清らかな楽しい舞踊が日本中で行なわれる日が待ち遠しい[116]」として，舞踊が，「全人教育」において必要不可欠の1項目であり，

表1　玉川学園　舞踊・リトミック年表

年号	※1 区分	舞踊勉強会・発表会・公演（※2 主なもののみ）	リトミック・舞踊 ―指導者と指導内容―	その他
昭和1	創生期			T14 リトミックが小林宗作によって日本に紹介される。
4			S4 小林を玉川学園に招き，直接指導を受ける。	S4 玉川学園創立
	開拓期		S8 小林の弟子山内千代子を小・中学部の専任として迎え，リトミックと音楽とを担当させる。 S10前後 小学部に舞踊の時間が特設される。指導は石井漠の直弟子の石井カンナ，和田内恭子，石垣初枝などが交代で当たる。石井氏振付の児童舞踊「水泳日本」「お池の選手」「カマキリ」「愛馬行進歌」などの作品の普及発展に努めた。	S8 石井漠が玉川学園出版部から「舞踊芸術」を刊行する。
10			S20 リトミック・舞踊の時間を小原純子(後の岡田)が担当する。石井漠の舞踊教育を実践すると共に自らも舞踊の創作活動を始める。	S20 第2次世界大戦終わる。
20			S28 岡田純子は日本民俗芸能を題材とする創作舞踊家黛節子の指導を受ける。	
	新生期	S29 第1回舞踊勉強会	――石井漠の作品を3分の1，小原純子の創作作品を3分の2	
30		S30 第2回 〃 S31 第3回 〃 S32 第4回 〃		
33		S33 第5回 〃 （創立30周年記念） S34 第6回舞踊発表会	――全学園的規模のもの	
	拡充期	S35 第7回 〃 S36 メキシコ・アメリカ公演 S37 第8回 〃 S38 第9回 〃		
40		S40 第10回 〃 S41 第11回 〃 S42 第12回 〃 S43 第13回 〃　S43 玉川大学ヨーロッパ派遣演劇舞踊団公演 S45 第14回 〃 S46 第15回 〃 S47 ギリシャフェスティバル参加玉川舞踊団公演		S39 岡田純子は玉川大学芸術学科の発足に備え，ジェネーブのダルクローズ，リトミック本校にて研修し，またイギリスのクリエイティブムーブメントおよび欧州各地の民俗舞踊を学ぶ。
50		S51 玉川学園舞踊公演 S52 玉川大学合唱と舞踊の集い S53 玉川大学舞踊合唱団アメリカ・カナダ公演		
54		S55 玉川学園創立50周年記念・舞踊発表会 S56 玉川大学演劇舞踊団イギリス公演	S54 アメリカ，カルフォルニア・クレアモンドで「ムーブメントを通して学ぶ」実践教育をしているアン・バーリン女史を玉川学園に招き，約5週間にわたって講習会をする。	
60				

※1　「玉川学園五十年史」の区分である。昭和54年は玉川学園創立50周年にあたる。

※2　その他に，行事及び研究会等で舞踊の発表が行われている。

舞踊に対する価値の認識と，舞踊教育の普及を主張する。

ここで，学校舞踊の必要性を，前述の「学校劇必要論」の内容に照らしてみると，②から⑫までの内容は，すっかり置き換えられるとみられる。すなわち，②子供の生活の充実，真の人格をつくるため，③遊戯の教育的価値，④舞踊的本能の啓培，⑤子供の純真な芸術的表現の発露，⑥舞踊の革新，⑦批評眼養成と正しき理解並びに舞踊の尊敬，⑧感情の純化，⑨内容上より，諸教科徹底のためにも，⑩徳性の涵養，⑪学校祭日一学校生活の文化化，⑫家庭改良と社会教化，というように置き換えられ，これが，学校舞踊の必要な理由となると考えられる。更に，①「統合芸術としての価値」の内容を検討すると，演劇は言葉による表現を含むけれども，舞踊は身体運動による表現であり，この点が異なると言うことが出来よう。演劇と舞踊とは，中心となる表現手段が異なっており，舞踊は言葉による表現を用いることはないと一般的には言われている。しかしながら，これ以外の点をあわせて考えると，舞踊も，統合芸術としての価値を持つと言えよう。更に言えば，舞踊は演劇よりも「身体的価値」をより多く持つ表現手段と言うことができると思われる。

玉川学園におけるその後の舞踊教育活動の充実とあわせて考えるとき，舞踊教育の必要性は，語られざる中に容認されていたとみるべきであろう。

第3節　「全人教育」としての舞踊教育の理論と実践

1.　玉川学園の舞踊教育の展開—附年表（表1参照）

玉川学園の舞踊・リトミック[117]の歴史を概観すると，まず，1925年に，小林宗作[118]によって，日本にリトミックが紹介され，1929年玉川学園創立と同時に，玉川学園においてリトミックの指導が開始された。1933年には，小林宗作の弟子の山内千代子が玉川学園のリトミック・音楽の専任の講師として迎えられ，また同年，イデア書院（後の玉川大学出版部）から石井漠著「芸術舞踊」が刊行された。さらに，1935年前後，小学部に舞踊の時間が特設され，石井漠の弟子の石井カンナ，和井内恭子，石垣初枝の3人が交代でこの時間を担当した。1939年の玉川創立10周年記念感謝祭，1941年の音楽と体操の会では，舞踊の発表が行なわれたという。第2次世界大戦後，1945年になると，小原國芳の子女である小原（後の岡田）純子が，舞踊，リトミックを担当し，1953年から，石井漠の他に，日本民俗芸能を題材とする創作舞踊家である黛節子及び，民俗舞踊のレパートリーを持つ江崎司に師事し，1954年から1971年の間に，15回の舞踊勉強会及び舞踊発表会を行った。更に，1961年から1981年の間に5回の海外舞踊公演を行なっている。また，1979年には，アメリカのムーブメント教育のアン・バーリン[119]女史を招聘する等，玉川学園においては，積極的に舞踊教育活動を実践しているといえよう。

「玉川学園五十年史」編纂の学園の成立発展の区分と対照して，舞踊教育の充実をみると，その特質は次のように言えよう。

① 大正後期から昭和前期の日本におけるモダンダンスの導入期をうけて，いちはやく学校に律動運動と創造性に着眼した教育を実施し，

② 芸術舞踊家の教育への直接の導入（招聘）を行った点があげられる。

③ 更に，日本の民俗芸能及び，日本舞踊に着眼し，洋の東西をふまえながら，舞踊の教育を行なおうとした点があげられよう。

④ 次に，教育の成果の発表として公演活動を開始し（昭29），また，玉川学園とメキシコのメリダ大学との国際交流[120]をきっかけとして，舞踊の海外公演にまで発展し，今日に至っている。

⑤ 更に，最近は，ヨーロッパのみならず，アメリカから舞踊芸術教育者[121]を招いて，〝ムーブメント〟教育の視野を拡げている。（小原國芳没後の継承）

2.　リトミック

リトミックとは，一般的には，「律動法，リズムの形成のしかた，およびそれに関する学習」[121]をいう。

創案者は，「スイスの作曲家エミル・ジャック・ダルクローズであ」[122]り，その目的は，「精神と身体との一致調和，自発性と反射性，精神の集中力と記憶力，創造力など」[123]の発達であり，「ダルクローズは，リズムのもつ特性をあらゆる面に進展させ，音楽教育のみでなく，これを舞踊，演劇の面にも適用した」[124]と言われている。

玉川学園では，創設当時から，小林宗作のリトミックの指導を受けている。玉川学園創設前に，玉川学園の創設者小原國芳は，成城学園の校長事務取扱であり，他方小林宗作は，成城学園の幼稚園の園長であり，共に，成城学園の教育者であった。小原國芳は，小林宗作について，「リトミックを日本に最初に輸入してくれた大事な人」[125]とし，成城学園には，「パイプオルガンの真篠俊雄君のスイセンで，来てもたっらのでした。成城での君の幼稚園運営は尊いものでした。特に，その百姓ぶりの労作なぞは。しかも，ダルクローズ張りのリトミック修業は中々の苦労でした。ダルクローズに半年以上師事されたでしょうが，その真髄を汲み取るほどの豊かな天分を

持ってた君でした。その他，ベルリンのボーデ[126]の表現体操，ミラノのパッカネルラの全体音感訓練[127]なぞ，道場破りするほどの奥儀を極めた人でした。…(中略)…リトミックの技は全く日本随一でした[128]」として，小原國芳は成城学園における小林宗作の「全人教育」の実践やリトミックの実践を評価して，小林宗作のリトミックを玉川学園の学校教育の中に導入したと言えよう。

更に，玉川学園では，「昭和8年には，小林氏の弟子である山内千代子を玉川の小・中学部の専任として迎えてリトミックと音楽とを担当[129]」させたという。

山内千代子は，「昭和2年8月，私（注，山内）の母校広島女学院で小林宗作先生のリトミック…(中略)…の講習会が開催された[130]」時に，初めてリトミックに出会い，「リズムを全身で表現する[131]」ことや，「リズムの創作[132]」の喜びや，「ピアノに表現する[133]」時の効果等を体験し，感銘を受けたことが契機となり，その後，小林宗作のもとで学び，玉川学園の教師となった。従って，山内が，玉川学園で教えたリトミックは，小林宗作がダルクローズから学んだものの継承であると推察される。

山内千代子は，リトミックの目的を，「全心身の発達を促[134]」し，「リズムに敏感なリズミカルな表現能力豊かな身体を作[135]」ること，すなわち，「我々が呼吸し生活している宇宙のリズムに目ざめ，鋭感に是を感受して肉体を通して表現することに依り，人間の感覚を調整し，肉体と精神の最も均衡ある調和のとれた発達を促進する[136]」こととする。換言すれば，山内は，調和のとれた心身の発達と，リズミカルな身体表現能力の育成，及び，生活リズムの感受性の練磨をリトミックの教育の目的として，玉川学園のリトミックの指導を行なったと言えよう。

また，山内は，「リトミックの3部門」として，ダルクロースの3部門，すなわち，「1．リズム運動，2．聴覚訓練，3．ピアノ即興[137]」をあげ，「リトミックの研究は，まず，第1部門から始めます。他の2つの部門は音楽研究家（専門家，音楽愛好家）とリトミック教師を希望する人々に必要な部門[138]」としているので，玉川学園のリトミックの授業では，第1部門の「リズム運動」を中心に行なったと推察される。

更に，「リズム運動」の指導法に関しては，「美しからざるものはなにひとつおかない。2．最小努力で，最大効果をあげよ。3．まねごとすべからず[139]」というダルクロースの示した「リトミック教師心得[140]」を原則とし，「目の前の子供達1人1人の長所を見つけると共に，欠点をす早く見つけ，その原因を研究しながら，最小努力で最大効果をあげる工夫をする[141]」として，個性を尊重し，1人1人を生かし，同時に合理的方法を工夫するという意味で，玉川学園の教育信条とも一致した指導を行なっていたことが推察される。

また，山内は，リトミックの指導の要点として，「注意を集中する訓練」，「身体のリズム運動」，「種々の強さの練習」，「音の高低（聴覚訓練）」という4つを[142]あげており，ここに，リトミック教育の内容の簡潔化をみることができると思われる。

ところで，第2次世界大戦時に，「戦争中は，外国で研究されたものとの理由で，リトミックという時間割がとなれくなり，又大東亜戦と同時に満州に疎開し，研究を続けることが出来なくなった[143]」と，山内は述べている。戦後は，再びリトミックの授業を行うことが出来るようになり，「幼児期から山内の指導を受けた小原純子[144]」が「昭和20年小学部講師となり，リトミック教育を継承[145]」するに致った。

更に，昭和27年頃より，「リトミックは幼児のうちにはじめるのが最も効果的[146]」という理由で，「3，4，5才の幼児の指導をはじめ[147]」たと言われている。

その後，リトミック教育は継承されて，玉川学園の学校教育の中に位置づいたと見ることができよう。

3．モダン・ダンスの導入からムーブメント教育まで

1935年（昭10）前後に，「玉川学園小学部に舞踊の時間が特設され，石井カンナ，和井内恭子，石垣初枝など石井漠氏の直弟子が交代で指導に当たった[148]」という記録があり，舞踊家の石井漠自身も，時には「遠く玉川まで教えに来[149]」たというので，1935年頃，玉川学園では，いちはやく，学校教育の中に，モダン・ダンスを導入していたとみられる

第2次世界大戦後には，小原國芳の子女純子（後の岡田）が，「玉川小学部において，リトミック，舞踊の時間を担当し，石井氏の舞踊教育を実践すると共に，自らも舞踊の創作活動を始めた[150]」と言い，モダン・ダンスは戦後も継承されている。

小原純子，1928年に，小原國芳の第2子次女として生まれ，「満1歳を越すか越さぬかに幼稚園に行[151]」き，リトミックを小林宗作から習い，翌年の1929年に，「玉川に移ってからは，小林君の直弟子で一の弟子の山の内千代子さんにミッシリ…(中略)…仕込んでもら[152]」ったといい，幼少時から，リトミックを学び，小学校から，モダン・ダンスを学び，父小原國芳の講演の後や，「体操と舞踊と音楽の会[153]」という地方公演や，「戦前の満蒙への

出征兵士たちへの慰問旅行[154]」等で，「水泳日本」，「愛馬行進曲」，「大航空の歌」等の舞踊作品を踊ったという。また，大東亜戦争の頃，「アイウエオの歌」，「楷棒体操」，「愛国の花」等の舞踊作品が盛り込まれた軍の兵士たちをなぐさめるための映画にも出演した。

戦後，玉川学園小学部の舞踊担当の教師となってからは，「日本舞踊の黛節子[155]」に師事し，また，後輩の浜田トメ子（後の小松原），奥田光（後の木村）という助手も得て，「昭和29年には，玉川学園礼拝堂において第1回の玉川学園舞踊勉強会を行い，石井氏の作品を3分の1，自らの創作による舞踊を3分の2発表し，以後，年に1度舞踊勉強会を行いつつ次第に実績を積み，1959年には，玉川学園創立30周年を期して，『玉川学園舞踊発表会』の名称を用いるまでになり，玉川の舞踊教育は，小学部中心から全学規模のものへと発展してい[156]」った。（尚，舞踊勉強会，発表会，公演等の舞踊作品リストは省略する）

更に，1964年に，「岡田純子（旧姓小原）は，玉川学園芸術学科の発足に備え，ジェネーブのダルクローズ・リトミック本校にて研修し，また，イギリスのクリエイティブ・ムーブメントおよび欧州各地の民俗舞踊を学んで，その後の玉川学園の舞踊教育の一層の充実発展を期[157]」すべく貢献した。1964年4年に，玉川大学文学部芸科術学演劇専攻が発足され，ここにおいて，岡田純子は，この演劇専攻の11人の研究室員の1人となり，「学園における舞踊教育の柱であって，専攻生にリトミックの基礎を習得させ，さらに，リトミックを通して身体表現の力を高めるために尽力している[158]」という。

次に，玉川学園の，舞踊に関する外国公演を概観すると，まず，①日程・団体名，公演地は，下記のとおりであり，1983年までに，5回行なわれている。

- 1961年　メキシコ親善使節団　メキシコ，アメリカ公演
- 1969年　玉川大学演劇舞踊団　ヨーロッパ公演
- 1972年　玉川大学舞踊団　ギリシャ公演
- 1978年　玉川大学舞踊合唱団　アメリカ・カナダ公演
- 1981年　玉川大学演劇舞踊団　イギリス公演

外国公演旅行の期間は，ヨーロッパ公演が2ケ月間で，残りの4回は，約1ケ月間となっている。

②外国公演実施の契機は，各公演共異なり，例えば，第1回目は，玉川大学が，メキシコのメリダ大学へ野口英世の業績を称えて記念像を寄贈し，そのお礼として，州知事から招聘を受けたことであり[159]，第2回目は，「第2回国際青年演劇祭に招待を受け，西ベルリンを訪問[160]」することになったことがあげられる。

③外国公演の目的は，国際教育，文化交流，国際親善にあるとみられる。

④訪問国・公演都市及び公演回数をみると，いずれも西欧文化圏であり，複数都市で10回以上の公演を行なっていることに特徴がある。

⑤公演に参加した人員構成をみると，第1回目以外は玉川大学文学部芸術学科演劇舞踊専攻生が主体となった活動であるとみられる。

⑥舞踊指導者は，玉川学園からは岡田純子，他に，民俗舞踊の黛節子，江崎司，日本舞踊の坂東三津五郎，尾上菊蕹，花柳寿恵幸，モダンダンスの江口隆哉，狂言の茂上千之丞，太宰久夫，石塚康雄等の名前がみられる。

⑦上演された舞踊作品の題目をみると，「さくら」，「黒田節」，「わらべ唄」，「阿波踊」，「越後獅子」，「鳥取笠踊り」，「津軽荒馬踊り」等がレパートリーとしてみられ，日本の民俗舞踊をアレンジしたものが主体となり，日本的な舞踊を異文化の中で上演することで，文化交流を行なうことに視点があてられているとみられる。

以上から，玉川学園では，外国公演において，舞踊，演劇，音楽等を上演し，特に，言葉を介さずに心から心へと伝わる舞踊を積極的に用いており，舞踊のレパートリーとしては，日本古来の民俗舞踊をアレンジしたものを中心として，他に，能の仕舞，剣舞，日本舞踊等を上演し，日本民族の持つ独自の舞踊を若者のエネルギーと共にアピールすると同時に，東西文化共通の根源的なものへ，動きを通して語りかけることで共感を求め，更には，東西文化の隔合した世界の創造を実現しようとしているとみることができよう。

次に，玉川学園のクリエィティブ・ムーブメント導入について触れると，これは，1964年に，岡田陽・純子夫妻が，玉川大学文学部芸術学科の発足に備えて渡欧したことを契機としている。イギリスの学校で，クリエィティブ・ムーブメントを見た時の印象を，岡田陽は，「クリエィティブ・ムーブメントというのが，大変学校教育の中で大切な地位を占めているということに，その時初めて気がつきまし[161]」たと述べ，子供の創造性を伸ばす真の表現活動として，舞踊教育におけるクリエィティブ・ムーブメント，また，演劇教育におけるドラマが，学校教育の中で定着していることを知り，玉川学園の舞踊教育・演劇教育の中に導入する契機となった。

その後，玉川学園では，クリエィティブ・ムーブメントについて情報収集をし，1971年には，アン・バーリンの著書や映画を通じて，彼女のムーブメント教育を知

り，1978年に，「小原國芳学術 奨励基金…(中略)…として，アメリカの舞踊教育家，アン・バーリン……を招聘」した。[162] 岡田陽は，アン・バーリンのムーブメント教育について，「普通教育の中で，子供達の身体的な表現活動というのが大変重要な位置を占める。このバーリンのような指導法が，教育として，子供の全人格的な形成の上で，大きな意味を持っているのではないか」[163]と身体的な表現活動と人格形成という視点から評価している。

ここで，アン・バーリンのムーブメント教育の内容をみると，まず，教育思想としては，「何かをしながら，何かをやりながら，動きながら学ぶということ」[164]というジョン・デューイのプラグマティズムの思想を基底に持つという。また，ムーブメント教育の目的については，「心と体は一体である。心と体と感情の調和を生み出すことが私達の目的である」[165]とし，調和のとれた心身及び感情の教育が目的であるとする。このようなムーブメント教育の指導法の特徴は，①イマジネーションを大切に用いる，②身体機能を十分に発達させる，③人前で表現する機会を持つ，④精神的治療に役立つといわれる踊ること自体を重視する，[166]という4つにまとめられる。

次に，このムーブメント教育と，ダルクローズのリトミックとを比較すると，心身の調和的発達，想像力，創造力を発達させるリズム教育という点では一致しているが，「ダルクローズの場合には，まず，リズムというものが1つの強制力を持って子供の前に提出される」[167]のに対し，アン・バーリンのムーブメント教育の場合には，「まず子供の動きというものがあって，それにリズムが付随していく」[168]とし，「子供の自発性ということを考えると，先生（注，アン・バーリン）のやり方のほうがいいように，私たちは考えてい」[169]ると，岡田陽は述べている。すなわち，教師から教示され，また影響されるのではなく，子供の内部の原因，力によって思考や行為がなされるという自発性の重視の意味では，リズムの強制というリトミックの枠から子供たちを解放したクリエイティブ・ムーブメントを尊重して玉川学園の舞踊教育において導入したと言えよう。

実際に，1976年以後の玉川学園舞踊公演には，小学部・中学部・高等部の児童・生徒による〝CREATIVE MOVEMENT〟と書かれた作品が発表されている。[170]

以上より，玉川学園の舞踊教育は，「真の芸術のあり方を求めて，試行錯誤をくり返しつつ活動を続けている」[171]と，岡田陽が述べているように，クリエイティブ・ムーブメントは，自発的教育と強制的教育，伝承と創造という互いに対極にあると見られる教育方法の間で，真の舞踊教育のあり方が問われつつ実践が重ねられていく中で，全人的な人間形成に不可欠な創造的価値を持つという意味で，玉川学園の「全人教育」を土台とした舞踊教育の中で根を張っていくものと推察される。

終章　結論

1.　大正新教育運動は，アメリカのJ.デューイのプラグマティズム及びドイツの新カント派の自発性，自律性を重視する理想主義的思想に代表される欧米の新教育思想と，これらの思想に基づく教育方法の改革及び新学校の設立等の影響を受けて，明治末から昭和初期にかけて展開された日本の新教育運動であると考えられる。明治期のヘルバルト派の教師中心主義の教育の反動として起こった児童中心主義の教育と，総括して見られ，その特性として，自学自律，個性尊重，経験主義，自由教育，芸術教育，労作教育等があげられる。

2.　大正新教育の実践は，第1次世界大戦後に盛り上がりを見せ，新しく創設された私学や師範大学附属小学校等が中心となって，全国的に推進され，その内容を1つ1つここで述べることは出全ないが，その実践につけられた名称から，様々な新教育実践が，学校の実情にあわせて独自になされたと推測される。大正10年には，新教育実践の推進力となったとも見られる「八大教育主張」大会が開催され，この大会の講師のひとりの小原國芳が「全人教育論」の講演をしており，小原國芳は，当時の新教育実践の代表的人物のひとりであったと言えよう。

3.　この時，小原國芳は，成城学園の主事として新教育を実践し，昭和4年に私学の「玉川学園」を創設し，「全人教育」を理念とした教育実践を行なった。「全人教育」は，人間文化の6方面すなわち学問，道徳，芸術，宗教，身体，生活の理想を真・善・美・聖・健・富とし，この6つの価値を創造することを教育の理想とする。この6つの価値を理想に掲げ，人間の本性をそのまま伸ばすことで，「全人教育」は，個性尊重の教育でもあるとし，また，6つの価値には，親密な相関関係があるので，6つの価値の理想が統合された渾一的調和的境地が，生活そのものの中で現出されることを目指した。

4.　「全人教育」の思想は，人間文化の全てを盛る教育として，従来の知的教育のみならず，労作教育，芸術教育などの実践教育も重視するものであり，その結果として，芸術教育（演劇・音楽・美術，舞踊等）を推進する

ことになった。「全人教育」において，芸術教育の果たす役割は大きく，小原は，特に，総合芸術としての「学校劇」の普及に尽力したが，他方，言葉を介さずに心から心へと伝わり，身体を媒介とするという体育的価値も合わせ持つ総合芸術としての舞踊にいちはやく着眼し，学校教育の内容として位置づけて，その実践を進めた。

5．更に，小原國芳は，「全人教育」の理想の中では，人生を矛盾あるものとして捕え，その相対する矛盾の合一の中に真実を見い出そうとする人生観に立つ。舞踊教育においても，この理想は反映しているとみられ，芸能という民俗の世界と芸術という才能の世界，外国の舞踊と日本の舞踊，男性の舞踊と女性の舞踊，大人の舞踊と子供の舞踊等の互いに対極にあるとも見られる表現分野や対象にも視点を広げて，人間と舞踊の真の境地の創造を目指したとみられ，今日の玉川学園の舞踊教育の多様な発展の素地をここに求めることができる。

6．玉川学園における舞踊教育の実践では，「リトミンクの技は日本随一」とされる小林宗作を招き，日本の学校教育の中に，ダルクローズのリトミック（〝ユーリズミックス〟）の教育を導入した点もあげなければならない。リトミックは，リズムによって，①身心の調和的発達，②集中力の強化，③リズム感覚の発達（聴覚教育）を促進させる感性的な教育であり，従って，芸術教育の基礎ともなるとされた。リトミックは，初期の頃，小・中学生を対象としていたが，昭和27年頃から，教育的効果を考慮して幼児も対象とし，今日の幼児教育に大きな影響を及ぼす端諸を開いた。その後，リトミックは，日本の中で，変形し，当初ねらった感性教育よりも形式化しているきらいはあるが，小原が，その運動と律動に着目した点は，幼児教育の本質的な部分として評価されるべきであろう。

7．玉川学園の舞踊教育の特徴は，「全人教育」すなわち，真・善・美・聖・健・富という6つの価値を調和的に発達させる人間形成としての舞踊教育を理想としているとみられ，この理想の実現のために，①リトミック，②モダンダンス，③デンマーク体操の3つを基礎とし，④演劇教育と平行して行ない，⑤日本の民俗舞踊を浄化して導入し，また，⑥心身のたくましさを強調させる男の舞踊を推進して来たとみられる。更に，昭和39年に契機を得て，⑦クリエイティブ・ムーブメントを導入した。このような多種の文化の共存を，単なる寄せ集めではなく，「良いものは世界から」という広い視野と，2つの対極にあるとみられる要素の合一に真実を見い出す小原國芳の教育観の反映と見るべきであろう。

8．第2次世界大戦後，昭和22年の学習指導要綱において，ダンスの教育内容及び方法が転換された。従来の表現を与える教育から，表現を引き出す教育として，最大の転換であった。指導要綱は，「表現」として，「表現技術，作品創作，作品鑑賞」を掲げ，また，民踊その他参考作品を行なってもよいとして，創造と伝承の方向を示し，戦後の舞踊教育の指標をうち立てた。

玉川学園の実践は，この頃，小原國芳の子女純子（後の岡田）が，舞踊の時間を担当し，創作を始めた頃であり，すでに実施していた芸術教育の流れを，より確実な実施にうつしている段階である。

建学の精神に支えられて，学校教育の中に，舞踊教育が個性的に育っていく私学の営みは，指導要綱の普及になお幾年かを必要としなければならなかったのに比較して，この時期の舞踊教育の中において，人間と舞踊の本質的価値に着眼して，教育理想の実現をはかった点で，史上に注目されるものである。

9．新教育思想は，知育偏重の教育に対して，創造性と体験学習を重視する自然的・調和的教育の推進に大きな影響を与え，創造性と実技とを合わせ持つ芸術教育を推進し，従って，創造的で，精神と身体との調和的価値を持つ創作舞踊が，舞踊教育の中でも推進されたと言えよう。

この点に関して，玉川学園の舞踊教育は，心身の調和的発達を促進させるリトミックと創造的舞踊とみられるモダンダンスを導入し，全人的人格形成，すなわち，持って生まれた自然を，真・善・美・聖・健・富という6つの価値の創造に向かって調和的に伸ばすという個性を持った全人格的人間の形成に役立てようとした。「舞踊の本質的な価値」をそのままにとりあげて，舞踊教育が，心身の教育という意味で推進されたとみなければならないと思われる。

10．玉川学園の舞踊教育は，この意味で，多くの問題を提起していると思われる。

第1に，舞踊教育のあり方そのものの問題提起である。玉川学園の舞踊教育は，「真の芸術教育のあり方を求めて，試行錯誤をくりかえしつつ活動を続けている」と，岡田陽（玉川大学文学部芸術学科）が述べているように，真のあり方を求めて実践が続けられ，多くの矛盾の合一が求められている。前述したように，創造と伝承，芸能と芸術，体育と文化，身体と精神，技術と創作，模倣と創造，遊戯と教育，外国と日本，男性と女性，大人と子供等，互いに対極にあるとみられる方

法，対象を考究し，真実を見い出し，学校のカリキュラムの中に具体化した玉川の実践は，むしろ，今日の舞踊教育の問題そのものの提起であるとみられよう。

第2に，学校教育と舞踊の在り方に関する問題提起である。現代の社会は，高度化，専門化されて，分化の方向を持ち，それに対応して，学校教育にも分化，細分化の傾向がみられ，統合の方向が欠けている。今後，舞踊教育は，身体と精神の統合としての価値を持つ，すなわち，〝人間そのもの〟を投じて行なう心身の表現として，芸術サイドからだけでなく，より根源的な人間の教育の視点から舞踊を見直すべきことを，小原の理念と玉川の実践は，暗示しているとみることができよう。

第3に，人間と社会の視点から，学校教育と社会文化の連携についての問題提起である。小原國芳は，舞踊を人間文化として学校教育の中に取り入れた。身体教育としての体育科教育の目的を一方に置きつつ，社会文化としての舞踊の本質を，本質のままに教育に位置づけ，かつ社会文化活動として，学校と社会の交流を持つ文化活動を推進してきた点があげられる。（海外交流の推進，各種舞踊の導入等）

小原の教育観は，学校と社会のゆるやかな融合関係の中に，個性豊かな舞踊文化をはぐくみ，人間と文化の発展を導き，真の舞踊文化創造の可能性を内包した学校教育を実施したとみられよう。

引用文献・注

(1)－(16)　小原國芳，「道徳教授の実際(1)」
玉川大学出版部　S39.4
(1)p.557　(2),(3),p.558　(4)－(9)p.559
(10)－(12)p.560　(13),(14)p.562
(15)　(16)p.565－6

(17)－(21)　小原國芳　「教育の根本としての宗教」
玉川大学出版部　S25.11
(17)(18)p.136　(19)(20)p.137
(21)p.138

(22)－(49)　小原國芳　「全人教育論・宗教教育論・師道」　玉川大学出版部　S50.6
(22)p.124　(23)(24)p.13
(25)(26)p.15　(27)p.17
(28)－(32)p.25　(33)－(41)p.26
(42)p.27　(28)－(32)p.25　(33)－(41)p.26
(47)p.31　(48)p.99　(49)p.100

(50)　小原國芳　「塾生に告ぐ」　玉川大学出版部　S39.7　p.338

(51)　チェコスロバキアの首都プラハの中央広場で行なわれる同国の国民大衆的体育運動であり，芸術運動である。Sokol は，スラブ語で「鷹」を意味する。

(52)－(59)　(50)同様
(52)－(54)p.340　(55)－(59)p.345
(58)p.341　(59)p.346

(60)　H. Schneider (1890－1955)

(61)　N. Bukh (1880－1950)

(62)　(50)同様　p.344

(63)－(65)　(22)同様
(63)p.91　(64)p.83　(65)p.84－91

(66)　玉川体操は，デンマーク体操が7割である。
（臼井和夫　「児童のための体育」　玉川大学出版部　S47.5　p.i）

(67)－(73)　(66)同様
(67)－(70)p.ii　(71)p.iii　(72)(73)p.ii

(74)－(78)　小原國芳　「学校劇論」　玉川大学出版部　S38.10
(74)p.325　(75)－(77)p.321　(78)p.325

(79)－(81)　小原國芳　「教育の根本としての哲学」
玉川大学出版部　S29.8　p.154

(82)－(103)　(74)同様
(82)－(84)p.326　(85)－(91)p.327
(92)－96)p.328　(97)－(101)p.329
(102)－(103)p.320

(104)　(22)同様　p.390

(105)－(106)　(1)同様　p.390

(107)－(109)　(74)同様
(107)「序」　(108)p.353　(109)p.348－384

(110)－(116)　小原国芳　「教育論文，教育随想(8)」
玉川大学出版部　S48.2　p.317

(117)　律動法リズム形成のしかた，及びそれに関する学習をいう。スイスの作曲家，E.J.ダルクローズ（1865－1950）によって創案された。正しくは，Eurhythmics（英）

(118)　パリ・リトミック学校に学ぶ，天野蝶と共に，リトミック普及に努めた。

(119)　Anne Lief Barlin，コンサート・ダンサーとして活躍後，カリフォルニア州のロサンゼルスにダンスセンターを設立し，多国籍コミュニティーで10年間ダンスの指導にあたった。1972年から，アメリカ国内芸術基金による学校訪問プログラムに参加。

(120)　玉川学園から，メキシコのメリダ大学に，野口英世博士の記念像を寄贈し，その結果，メリダ大学における記念像の除幕式に，小原国芳学長他39名の玉川学園の職員，学生が招待された。

(121)　(119)参照

(122)　参考資料は，下記のとおりである。
①玉川学園五十年史編纂委員会編　「玉川学園五十年史」　玉川学園　S55.10　p.273－6

②岩渕文人　「舞踊関係主要行事一覧表」　玉川大学図書館
③玉川学園舞踊勉強会，舞踊発表会プログラム
④玉川大学演劇舞踊団　「'81　イギリス公演記録集」　玉川大学文学部芸術学科発行　S57.3
⑤岡田陽　「玉川学園の舞踊教育」　TES 4－4 p.63－64　S55.8

(121)－(124)　「標準音楽辞典」　音楽之友社　S41.4 p.1372
(125)　(110)同様　p.306
(126)　Rudolf Bode　(1881－1970)　表現体操の提唱者
(127)　不明
(128)　(110)同様　p.306－307
(129)　(122)①同様　p.273
(130)－(142)　山内千代子　「リトミック」,「全人」　S29.9
(130)－(133)p.22　(134)－(141)p.23
(142)p.24－27　(143)p.22
(144)－(145)　(22)①同様　p.273
(146)－(147)　(130)同様　p.22
(148)　(122)同様　p.274
(149)　(110)同様　p.307
(150)　(122)同様　p.274
(151)－(154)　(110)同様
(151)p.306　(152)p.307
(153)－(154)p.308
(155)－(158)　(110)同様
(155)－(157)p.274　(158)p,630
(159)－(160)　(122)④同様
(159)p.36　(160)p.40
(161)　岡田陽　「玉川学園の舞踊教育」　第9回舞踊学会シンポジウム　1980.6（録音テープ）
(162)　玉川学園　「ムーブメント指導者講習会」　（パンフレット）　S54.5
(163)　(161)同様
(164)　岡田陽　「アン・バーリンのムーブメント教育」,「全人」　玉川学園　S54.9　p.10
(165)　(162)同様
(166)－(169)　(164)同様　p.6－9
(170)　①玉川学園舞踊公演プログラム　1976.7
②玉川学園創立50周年記念舞踊発表会「クリエイティブ・ムーブメント」プログラム，1980.9
(171)　(170)②同様

参考文献

◦唐沢富太郎　「近代日本教育史」　誠文堂新光社　S43.3
◦唐沢富太郎　「明治百年の児童史（上）」　講談社　S43.9
◦梅根悟　「世界教育史」　新評社　1967.9
◦土屋忠雄他編　「概説近代教育史」　川島書店　S42.10
◦仲新　「学校の歴史　第1巻　学校史要説」　第1法規社　S54.5
◦仲新　「学校の歴史　第2巻　小学校の歴史」　第1法規社　S54.5
◦村井実，吉田登編　「教育思想」　学文社　S46.12
◦中内敏夫　「日本近代教育史」　平凡社　S46.12
◦小原國芳（共）「八大教育主張」　玉川大学出版部　S51.7
◦尼子止　「八大教育批判」　モナス社　T12.5
◦小原國芳編　「日本新教育百年史(1)」　玉川大学出版部　S45.4
◦小原國芳　「玉川塾の教育」　玉川大学出版部　S38.11
◦小原國芳　「教育論文・教育随想(3)」　玉川大学出版部　S39.12
◦鯵坂二夫　「小原教育論」　玉川大学出版部 S40.5
◦岡田陽　「全人教育における芸術教育」（玉川学園創立五十周年記念論文集編集委員会編　「玉川学園創立五十周年記念論文集」　玉川大学，玉川学園女子短期大学より）
◦高山岩男　「小原國芳『全人教育』の理念について」（同上より）
◦玉川学園編　「玉川学園小学部　全人教育の実践」　玉川大学出版部　1979.11
◦玉川学園編　「玉川学園中学部　全人教育の実践」　玉川大学出版部　1979.11
◦玉川学園編　「玉川学園高等部　全人教育の実践」　玉川大学出版部　1980.1
◦岡田陽・岡田純子編　「演劇と舞踊」　玉川大学出版部　S39
◦石井漠　「舞踊芸術」　玉川大学出版部　S8
◦石井漠　「世界舞踊芸術史」　玉川大学出版部　S18